

Kashiwanoha International Campus Town Initiative

柏の葉国際キャンパスタウン構想

2025

フォローアップ調査 2025【概要版】



構想の概要

■構想のねらいと対象

大規模開発が進行する柏の葉地域は、我が国有数の大学や公的研究機関が立地しており、世界水準の先端モデル都市形成に向け、高いポテンシャルを持っています。本構想は、行政、大学、民間企業、市民・NPO 等が連携・協働し、柏の葉のポテンシャルを最大限に生かした先端的で自立した都市づくりを実践するための構想として、2008 年 3 月に策定されました。その後、二度の改定を行い、現行の構想は「データ駆動型のスマートシティの実現」や SDGs の観点等を追加した 2019 年度改定版となります。

本構想の主たる対象区域は、柏の葉キャンパス駅周辺並びに柏たなか駅周辺のつくばエクスプレス沿線の土地区画整理事業区域と、県立柏の葉公園を中心に学術研究機関等が集積する通信基地跡地の土地区画整理事業区域等を含む、約 13km²の区域です。

■構想で描く将来像と理念

“大学とまちの融和”、すなわち、まち全体が大学のキャンパスのように緑豊かで質の高い空間となり、また、知的交流の場となること、本構想の目指す都市の姿です。その実現のために、地域社会に必要な公的サービスを担う「公」、地域の活力と魅力の向上を担う「民」、そして専門知識や技術を基に先進的な活動を担う「学」の各主体が、従来の枠組みを超えて連携し、「公・民・学の連携」による知的交流の中から、新たな知と産業、文化を創造する「国際学術研究都市」となり、これを通じて、優れた自然環境と共生し、健康で質の高い居住・就業環境が実現される、持続性・自律性の高い「次世代環境都市」となることを本構想の理念としています。そして、個別のテーマに沿った 8 つの目標と各目標ごとの推進方針並びに重点施策を掲げています。

■継続的なフォローアップ

本構想は、千葉県、柏市、東京大学、千葉大学が共同で作成したものであり、現在の法制度や政策を超えた提案も含まれています。そのため、「公・民・学」が共同で設立・運営する柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK）を事務局として、継続的にフォローアップのための委員会並びにテーマ別の部会を設置し、各団体の協力・連携のもと、実現に向けた更なる検討や関係機関との調整を行い、制度の改善や上位計画へのフィードバックを行いながら推進しています。本冊子は、こうした考え方に基づき年次報告としてまとめ、公表するものです。

8 つの目標

目標 1	環境と共生する田園都市づくり	豊かな自然と都市のみどりにふれあいながら、環境にやさしい暮らしを楽しめるまち
目標 2	創造的な産業空間の醸成	創造的な交流にあふれ、職住が一体となった自立したまち
目標 3	国際的な学術・教育・文化空間の形成	一生「学び」を楽しむことのできる、知的好奇心を刺激するまち
目標 4	サステナブルな移動交通システム	環境負荷が少なく、便利で快適な移動交通が、暮らしの質を高め活力を育むまち
目標 5	健康を育む柏の葉スタイルの創出	あらゆる世代の健康をサポートし、地域の中で一生健康で暮らすことのできるまち
目標 6	公・民・学連携によるエリアマネジメントの実施	支えあいによって地域の暮らしと活力を持続・向上させる自律的なまち
目標 7	質の高い都市空間のデザイン	大学キャンパスのように豊かな緑のなかに賑わいが映える快適なまち
目標 8	イノベーション・フィールド都市	常に最先端の取り組みを受け入れながら、変化しつづけるまち

2025 年度の主なトピック

■開発に係る動向

柏の葉キャンパスエリアの柏北部中央地区一体型特定土地区画整理事業は、都市軸道路と 16 号のアンダーパス周辺工事や縁辺部の道路工事などが進められている。2026 年 1 月 28 日付で国土交通大臣認可を経て**事業計画変更**が行われ、事業期間の 3 年延伸（令和 10 年度→令和 13 年度）、事業費の増額、柏の葉小学校校舎の増設に伴う近隣公園用地の一部の学校用地への編入と、代替となる街区公園の新設などが決定された。

イノベーションキャンパス地区には、**SMC Japan Tehnical Center が竣工**し、これにあわせた**アクアテラスの改修も完了**。近接街区には、**日本製鋼所の中央研究所（仮称）の立地が決定**しデザイン協議が行われた。千葉大学柏の葉キャンパス内では、正門前に「**Biohealth Open Innovation Hub**」が開設された。千葉大内通路から東京大学柏 II キャンパスに直接出入り可能な門が設置された。（目標⑦）

柏の葉キャンパス駅前では最後の大街区（149 街区）の工事が進んでおり、高層住宅棟に先行して**オフィス棟（KOIL BASE）が竣工**した。9 月には地域待望の**近隣センターの整備計画が公表**され、プロポーザルを経て設計者を選定。ふるさと協議会での意見集約や「みんスタ」を活用した対話型の計画検討が進められている。企業立地ニーズの高まりを受けて、こんぶくろ大街区では、土地利用条件の整理とともに、開発の考え方を定めた「**柏の葉イノベーションフォレスト地区まちづくりビジョン**」が策定された。（目標⑦）

柏たなかエリアでは開発も一段落するなかで、当エリアの生産緑地や農的環境を活かした「**農あるまちづくり**」の持続化や、**新たなコミュニティ形成に向けた環境コンビニエンスーションの活用**など、まちづくりの次の展開に向けた検討や試行を行った（目標⑤）。

■スマートシティプロジェクトと産業創造

2019 年 5 月に国土交通省のスマートシティ先行モデルプロジェクトの指定を受け、実行計画に基づく取組を進めている。今年度、**実行計画を改定**。新たにテーマに据えた「学び」に関して、経済産業省補助を受け、学校を地域のみんなで支える学びのプラットフォームである「**まちスク**」の**導入実証**を行った。（目標⑧）

柏の葉スマートシティを支える仕組みの一つである柏の葉データプラットフォームは他都市展開に取り組まれており、昨年度本格導入された**神戸市では渋滞対策の実証**が行われたほか、**新たに、愛知県、焼津市、船橋市などでの採用が決定**した（目標⑧）。

柏の葉のリビングラボ「**みんなのまちづくりスタジオ**」では、新設の 2 号近隣公園をテーマにした「**みんなでつくるあたらしい公園**」編を昨年度から継続し、地域の声を設計に反映。2026 年 2 月には「**みんなでつくるあたらしい近隣センター**」編がスタート。「**みんスタ ONLINE**」の有効活用も模索しながら、オンサイト・オンラインを組み合わせた参加・共創の仕組みが拡充されている（目標⑤⑧）。

まちをフィールドとした企業との共創サポートプログラム "CO-GROWTH" では、(株)明治との「**ヨーグルトで街にミライをプロジェクト**」が継続され、**千葉大学予防医学センターとの共同研究「ウェルビーイングルト・リサーチ」**が開始された。（目標⑤）。

柏市のスタートアップ支援事業は今年度も継続しておりコミュニティも拡大。スタートアップの集積をさらに加速し多様な循環を生み出すための施策や道筋として、昨年度策定した「**柏の葉スタート**

アップ戦略」に基づき、課題の深掘りや具体的施策の検討が進められた。今年度、**東京大学と連携した学生向けの企業セミナーや、高校生向けのアントレプレナーシップツアー**を開催。若い世代の起業を積極的に支援する取り組みにも力が入れた。（目標②）

毎年秋に開催されてきた柏の葉イノベーションフェスは、今年度はビジネスプロモーションを主とする「イノベーション・ショーケース」（10月）と、地域参画・共創を目的とした「イノベーションフェス」（3月）に分けて開催。3月のイベントにおいて、一般参加型のアイデアコンテスト「ハツメイノハ」の公開審査も行われた。（目標⑧）

2022年に発足した**柏の葉ライフサイエンス協議会**では、各機関の横断連携による課題解決や社会実装を支援。「第2回 コウリュウノハ」には、柏の葉に関わる多様な組織・団体から200名以上が集った。また、UDCKでのサイエンスバーも継続し、研究者やビジネスパーソンとの交流機会の拡大を図った（目標②）。

東京大学大学院新領域創成科学研究科では産学協創促進を目的として「第2回 企業と研究者との交流イベント」を開催した。（目標②）

■持続可能な次世代都市づくり

2023年度に定めた柏の葉エリアの脱炭素化目標の実現に向け、柏の葉の主要な立地機関からなる**脱炭素ワーキング**を今年度も開催。新たに**地域新電力会社**を設立した柏市との連携も深めるとともに、各機関のEMSを統合する新たな「**柏の葉EMS**」の構築に向けた**構想・提案**を行った。柏の葉の環境イベント「**かしわ環境フェスタ**」は3年目となり、今年も多くの地域活動団体や企業の参加を得て盛大に開催された。イベントを通じて個人の環境アクションを後押しするエコチャームを制作した（目標①）。

交通面では、昨年度柏市中心部等で導入された**シェアサイクルHELLO CYCLING**が、9月から柏の葉エリアにも展開。ポートも順次増設され、利用も堅調である。東大シャトルバスの一部として2019年より実証運行している**自動運転バス**は、経産省補助事業の最終年度を迎え2026年1～3月一部区間にて「**レベル4**」運転が**実現**した。これは東京圏初となるもので、多くの注目を集めた。国交省のモデル事業として、路面標示サインや交差点改良など**自動運転の実装に向けた走行空間実証**の二年目が行われた。**公道での走行中給電の技術実証**は学内資金を得て、継続が決まった（目標④）。

柏の葉キャンパス駅周辺エリアでは、(一社)UDCKタウンマネジメント(UDCKTM)や地元の協議会等が連携したエリアマネジメントが行われている。**マルシェコロール、ハロウィン、ラジオ体操、マイ屋台プロジェクト、スポーツマルシェ、柏の葉高校の街文化祭**など、地域が主体となったイベントも活発化し定着しつつある（目標⑥）。

一方で、**まちの植栽や花壇の継続的な維持管理、ムクドリ対策、高齢化が進む住宅地の暮らしの維持、災害への備え**といった課題への備えはまだ道半ばである。**ふるさと協議会やまちづくり協議会とも連携**し、こうした課題に対応する新たな自治や支えあいのあり方に係る議論を具体化していく必要がある（目標⑥）。

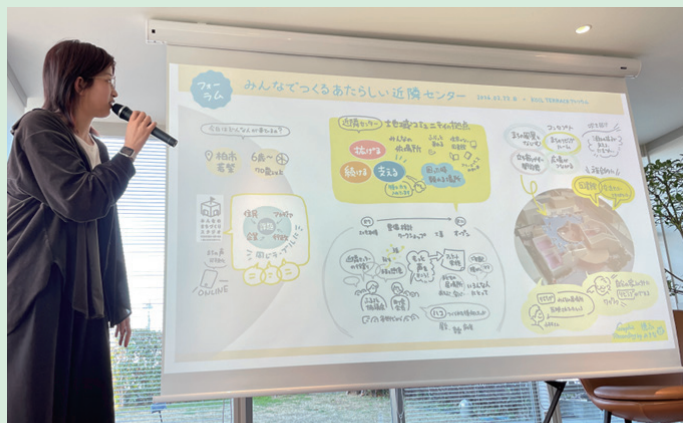
探究学習や実践的学習のニーズが広がるなか、地域と学校が連携した**子どもたち向けの学びや体験のプログラムも充実**しつつある。受け入れ体制を整え、内外に学びのフィールドを開き、拠点化していく（目標③）。



▲千葉大学 Biohealth open Innovation Hub 開設



▲自動運転バスレベル4実証



▲柏の葉近隣センターの整備計画の公表を受けた参加型の検討開始



▲SMC Japan Technical Centerの竣工とアクアテラスリニューアル

目標 1 環境と共生する田園都市づくり

「エネルギー」は柏の葉のまちづくりにおける重要なテーマであり、「暮らしの満足度を下げずに省 CO₂、省エネを実現する」ことを目指している。柏の葉キャンパス駅前街区では、CO₂ 見える化システムのマンションへの導入、街区をまたぐエリアエネルギーマネジメントシステム（AEMS）の実装など、エネルギー分野で先導的な取り組みを進めてきた。国際社会において「脱炭素社会」の実現が喫緊の課題となるなか、柏市においても 2022 年 2 月に「気候危機宣言」を行い、2050 年までに二酸化炭素排出実質ゼロを目指す「ゼロカーボンシティ」が表明された。こうした状況も踏まえ、柏の葉のまちづくりにおいても目標を「脱炭素」に据えて戦略を練り直し、2023 年度に定めた「脱炭素戦略」では 2030 年度のカーボンハーフを目標に据え、地域の立地機関が連携した取り組み体制と具体策の検討を進めているところである。

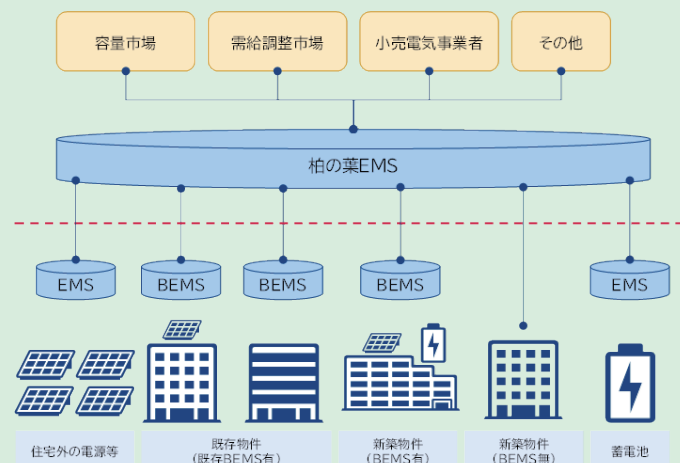
多くの住民が暮らすまちでもある柏の葉では、インフラや建築での対応のみならず、市民の意識を高め、暮らしの中での省エネや、フードロス、廃棄物削減等、社会的関心の高いテーマでの市民参加型のエコ活動を進める必要もある。柏市と連携した啓発イベント（かしわ環境フェスタ）の開催や、市民とともに環境行動を進める活動にも力を入れている。

柏の葉では、自然環境保全に係る活動も活発であり、主にこんぶくろ池自然博物公園並びにアクアテラスという二つの拠点において、市民と大学・専門家が連携した調査や活動が行われた。

1. 柏の葉脱炭素戦略 | 脱炭素部会

国際社会においてカーボンニュートラルの一刻も早い実現が求められるなか、「2030 年に 2013 年比 46% 減、2050 年までにカーボンニュートラル」という国の目標（2021 年 10 月）を柏の葉に置き換え、目標値と方策を定めるべく、2023 年度に脱炭素部会を設置し、2030 年度の目標値を約 5 万 4 千 t CO₂（2013 年度比▲ 52%）にまで削減すること、2050 年にはカーボンニュートラル（CN）を実現するという目標を定めた。2024 年度、東京大学や千葉大学、国立がん研究センター、産総研など柏の葉に立地する主要な研究機関や事業所からなるワーキングを設置し、各機関のエネルギー利用の現状や見通し、脱炭素に向けた取り組み方針を共有しながら、エリア全体で取り組む意義や方法について議論を深めてきた。

2025 年度は、柏市にゼロカーボンシティ推進課、地域新電力会社が設立されたことを受け、柏市との連携も強化。エリアでのエネ

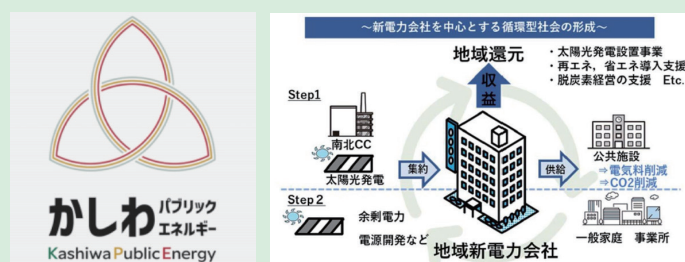


▲（仮称）柏の葉 AEMS のイメージ

ギーマネジメントの実現に向けた検討を具体的に進めるため、国の補助事業の活用を視野に入れた施策検討を進めた。各ステークホルダーが整備している既存の EMS を統合し、エリア全体のマネジメントを実現する「（仮称）柏の葉 EMS」を構築することで、CO₂ 排出量の削減に加え、DR ポテンシャルの創出、BCP 向上などの多様な価値創出を目指す提案をとりまとめた。

2. 地域新電力会社の設立 | 柏市ほか

柏市、柏商工会議所、株式会社千葉銀行の 3 者は、2025 年 4 月 18 日に地域新電力会社「かしわパブリックエネルギー株式会社」を設立。小売電気事業の届出等の手続きを進め、2026 年 4 月 1 日からの電力供給を目指している。当会社では、脱炭素への貢献、地域経済の活性化、市民の生活の質の向上を事業方針に掲げ、柏市で生産された電力を柏市で消費する「電力の地産地消」を進める。当面は、柏南北クリーンセンターの廃棄物発電の余剰電力や太陽光発電設備の電力を調達し、庁舎や小中学校など公共施設 90 か所へカーボンフリー電力の供給を行う予定。経営安定後、事業開始 3 年目を目標に供給先の拡大を検討し、まずは全公共施設への供給を、その後、事業所や一般家庭に供給先を拡げる構想である。



▲地域新電力会社「かしわパブリックエネルギー」の事業イメージ

3. かしわ環境フェスタ in 柏の葉 開催 | UDCK、柏市

環境への意識を多くの方に広めるとともに、脱炭素につながるまちづくりを考えるイベントを 2023 年度より開催している。今年度も UDCK と柏市が共催する形で開催。2025 年度は、ゴミの分別やマイボトル、花壇・清掃等のエコ活動といった、環境に配慮した行動を印字したエコチャームを制作し、これを自ら 1 年間頑張る「エコ宣言」とセットで配付することで、一過性のイベントとして終わることなく、環境行動の変容に繋げる仕掛けを企画した。また、環境に関する知識を深めつつ、会場間の回遊性を高め多くのプログラムに触れられるよう、環境クイズラリーの仕組みを加えた。イベントは広く「環境」をテーマに、「聞く」「見る」「体験する」の 3 つのカテゴリで、大人も子供も楽しみながら気づきを得られる企画が充実。昨年度よりも多い全 31 団体の協力を得て、22 の催しが行われた。昨年度のフェスタを期に常設されたストリートピアノをペイントしてお披露目する企画、東京大学大学院新領域創成科学研究科とユニクロがコラボした服のリサイクルを学ぶ企画などが初開催された。

雨天の影響もあり来場者は約 400 名と昨年度よりは少なかったが、各ブースは賑わいを見せた。

・日時：2025 年 12 月 14 日(日) 10:00 ~ 16:00

・場所：ゲートスクエアプラザ、UDCK、東京大学駅前サテライトホール、柏の葉カンファレンスセンター、ららぽーと柏の葉 3F、植物工場



▲廃棄革を活用したエコチャーム

▲東大×ユニクロ企画

4. 環境映画上映会の開催 | UDCK、かしわ環境ステーション
2026年3月7日(土)、UDCKとNPO法人かしわ環境ステーションの共催にて、映画を見ながら、たのしく環境や暮らしを考える上映会&トークイベント「K-SCREEN」を開催した。

上映作品は、スローフード・ローカルフードをテーマにした「食べることは生きることーアリス・ウォータースのおいしい革命ー」。上映に先立ち、料理研究家の大瀬由生子さんによるスペシャルトークも実施。「食」というものの大切さや可能性を、トークと映画の両方から深く考える贅沢な機会となった。

60名定員のところ、満員御礼の65名の方にご参加いただいた。



▲映画上映会「K-SCREEN」 大瀬由生子さんスペシャルトーク

5. 自然・生態系の保全活動

■生態系ウォーズ

昨年度実施した「みんなのまちづくりスタジオ deco 活編シーズン2」からアイデアが生まれた外来種対在来種の対決を通じて生物多様性を学ぶトレーディングカードゲームである。柏の葉エリアの身近な自然を題材とし、「遊ぶだけで詳しくなる」ことをコンセプトとしている。フォトコンテストを通じた住民参加型のカード制作や、地域の保全活動と連動したカード配布を行うことで、自然への親しみと環境保全意識の向上を図ることをねらう。

昨年度の試遊会において高いニーズを確認したことを受け、今年度はチャレンジ補助金を活用し、「柏の葉編」として第1弾・第2弾をリリース。公式対戦イベントや関連イベントへの出展を行い周知を図る一方、地域清掃活動の参加特典としてカードを配布することで、参加者が増加。地域コミュニティに浸透し効果をあげている。

■こんぶくろ池自然博物公園 | NPO法人こんぶくろ池自然の森
NPO法人こんぶくろ池自然の森を中心に、生態系の調査(調査班)



▲生態系ウォーズ カード

並びに園路等利用環境の整備(里山班)が継続的に進められている。活動の担い手が不足することなく保全・調査が継続できるよう、今年度も新規会員獲得と活動の周知を意識して活動に取り組まれた。UDCKはイベントの企画・広報支援をおこなった。

くもの観察会

・日時: 2025年10/5(日) 10:00~12:00

きのご観察会

・日時: 2025年10/19(日) 10:00~12:00

里山保全活動

・日時: 2025年10/26(日), 11/1(土), 11/16(日), 2/22(日), 3/7(土), 3/15(日) 9:00~12:00

森のクラフトワークショップ

・日時: 2025年11月3日(月祝) 13:00-15:30

※いずれの企画も場所は、こんぶくろ池自然博物公園

■アクアテラス | UDCKTM ほか

昨年度に引き続き夏場にヒシが繁茂したことから、参加型の刈り取り作業を8月20日に実施しヒシを回収した。

今年度進められたアクアテラスの再整備に際しては、水辺や法面に進入している外来植物を駆除するなど、自然と人が共生する水辺空間の再生を意識した植栽計画が行われており、次年度以降地域と連携した丁寧な管理を進める必要がある。



▲森の材料でクリスマスリース

▲アクアテラスヒシ清掃

今後の課題と展望

エリアの脱炭素化に向けて国の補助事業の採択を目指しており、次年度以降、エリアに存在する既存EMSについての情報収集を行うとともに、エリア全体でのマネジメントによって得られる各種効果の定量評価や効果検証を実施し、実装する統合版EMSの要件定義を行う予定である。大型計算機など、多くのエネルギーを消費する研究施設が集まるまちゆえの難しさはあるものの、一方で先進的な機器や仕組みの研究開発や取り組みの実証・実装を他に先んじて取り組める環境でもある。研究機関や企業連携のもと、柏の葉ならではのアプローチを模索し、目標の達成に向けて歩みを進める。

環境や持続可能な社会について考えるきっかけとして、3回目となったかしわ環境フェスタは、公・民・学が連携したまちの環境イベントとして定着しつつある。今年度開始した映画上映会、生態系ウォーズなども、すそ野を広げる独自のコンテンツとなる。アカデミアと民間企業、市民が一緒になった議論と取り組みを引きつづき進める。

次年度以降の重点課題

- ▶「脱炭素戦略」の推進に向けた地域EMSの要件定義
- ▶暮らしの中での脱炭素、エコ活動の推進に向けた啓発活動の継続と個別活動の支援

目標 2 創造的な産業空間の醸成

地域のベンチャー・中小企業等へはこれまで、柏の葉オープンイノベーションラボ（KOIL）を拠点に様々な支援メニューが提供されており、TXアントレプレナーパートナーズ（TEP）を中心とした技術系ベンチャー企業への重点的なハンズオン支援も継続されている。2023年度からは柏市が主導するスタートアップ支援事業が始動。これまでKOILやTEPにおいて行ってきたプログラムとの公共による支援策の多面的な連携により、まち全体としてスタートアップを育てていくための「スタートアップ戦略」を昨年度策定した。アジア各国から選抜された技術系スタートアップを集めた国際アワード、アジア・アントレプレナーシップ・アワード（AEA）は昨年度まで13回にわたって開催され、国際的なネットワークをつくってきたが、今年度は開催が見送られ、いったん終了となった。2021年度には内閣府のGreater Tokyo Biocommunityを構成する8つのエリアのひとつとして柏の葉が位置づけられ、東京大学・千葉大学・国立がん研究センター東病院等が連携したライフサイエンス拠点の形成に向け、2022年に「柏の葉ライフサイエンス協議会（KLS協議会）」が設立され、ソフト・ハードの取組みが進められている。ここ数年、柏の葉では、大企業の研究開発拠点の立地が進んでいる。アカデミアとスタートアップに加え、大企業も含め、これらが連携してイノベーションを生みだすための体制・環境づくりについて、検討と議論が進められた。

1. 柏市スタートアップ・コンシェルジュ事業

■情報発信「柏 STARTUPS」 | 柏市、TEP

柏市の「スタートアップ・コンシェルジュ事業」（2023年度～）において、柏市内に立地しているスタートアップ、柏市内で事業活動を行っているスタートアップ、または柏市内での立地や事業活動に関心のあるスタートアップを対象として、ウェブサイトやパンフレットを通じた「柏 STARTUPS」と題した情報発信を継続している。また、市外における情報発信活動としては、TEPが毎年開催している「J-TECH STARTUP SUMMIT」（会場：東京有楽町Tib）にて、柏市内のスタートアップ、輝翠株式会社がプレゼンやブース展示を行い、広くメディアやVC、大手企業等に存在を発信した。

■柏の葉スタートアップ NIGHT | 柏市、TEP

「柏の葉スタートアップ NIGHT」は、柏市事業の一環で開催されている柏市内外のスタートアップコミュニティの交流会である。柏市とTEPが共催し、今年度は二回開催。第5回（8月29日）では、柏の葉を代表するスタートアップに成長しつつあるPale Blueの浅川氏を、第6回目（2月17日）では、2025年夏に柏の葉から初めの上場を果たした、フラー株式会社の櫻井氏にスピーチを頂いた。



▲柏の葉スタートアップ NIGHT

2. KOIL 及び TEP によるスタートアップ支援

柏市「スタートアップ・コンシェルジュ事業」のなかで、市内スタートアップに対して、TEPの経験豊富なメンバーが常時相談やメンタリングに対応できる体制が構築されている。今年度も継続され、月平均約5.9件の相談・メンタリングが行われた。

■TEP ビジネスプラン作成セミナー／KOIL STARTUP PROGRAM

TEPが2012年より毎年、KOILおよび三井ガーデンホテル柏の葉を会場に開催している「ビジネスプラン作成セミナー」は、今年度は6月28日、6月29日、7月12日、7月19日に開催された。本セミナーは毎年、柏市の「特定創業支援事業」に認定されており、受講終了生は申請により柏市での法人設立費が半額免除される。

今年度も「KOIL STARTUP PROGRAM（KSP）」が連携開催されKSPに選抜された企業は、上記セミナーを無料で受講できるほか、メンタリングや、KOILのコワーキングスペース1年間無料利用等が追加される。第二期となった今年度は、多数の応募の中から3社を選定。「ビジネスプラン作成セミナー」の期間を経て2024年10月28日に最終発表会を実施した。



▲KOIL STARTUP PROGRAMの様子

3. 柏の葉スタートアップ戦略の推進 | スタートアップ部会

2023年度より、柏市がスタートアップ施策を本格化させ、2024年度にはスタートアップ部会の活動を本格化している。部会にはUDCK、三井不動産、柏市、東葛テクノプラザ、東大柏ベンチャープラザのメンバーが参画し、2024年度末、「柏の葉スタートアップ戦略」を取りまとめた。2025年度のスタートアップ部会は、この戦略をもととして具体個別の施策がどのように進行しているかや、関連プロジェクト、関係企業等の情報共有を主として、2か月に1度のペースで開催。戦略を指針として、以前よりも密に連携した情報共有や総合的支援の実施が取り組まれるようになっている。

4. 若者を対象としたスタートアップ支援

■アカデミア発ベンチャー経営者が語る起業のリアル

柏の葉エリアの学生や研究者をはじめ起業や事業作りに対して少しでも興味のある方を対象に、起業や事業化に取り組むきっかけを提供することを目的に、実践的なナレッジを学べるセミナー「アカデミア発ベンチャー経営者が語る起業のリアル」を開催。「研究室から飛び出した起業家たちが語る経営の舞台裏」をテーマに、アカデミア発の株式会社Yanekaraの吉岡大地氏や同じくアカデミア発のWOTA株式会社の奥寺昇平氏を招いたパネルディスカッションを実施。スタートアップを含むさまざまなケースに応じた起業プロセスの解説や、柏の葉エリアにおける起業家支援プログラムの紹介、交流会を行った。

- ・日時：2025年11月14日（金）17:00～
- ・場所：東京大学 柏キャンパス 新領域環境棟 1F FS ホール
- ・主催：Relic、三井不動産、東京大学大学院新領域創成科学研究科

5. ライフサイエンス・メディカル分野の産業育成

■三井リンクラボ Cellares Corporation の開発製造拠点立地決定
米国 Cellares 社が、再生医療等製品のアジア初の開発・製造拠点を、「三井リンクラボ柏の葉2」内に2027年に開設することが、2025年5月に発表された。Cellares社は、21世紀の「Living Drug」とも呼ばれる再生医療等製品の製造を行う米国企業。国内での製造・供給が可能となることで、がんなどの難病の治療に関わるドラッグロス・ドラッグラグの解決の一助となることが期待されている。



▲三井リンクラボ柏の葉2 イメージパース ▲導入予定の最先端装置 Cell Shuttle
(出典：三井不動産リリース)

■柏の葉ライフサイエンス協議会

「柏の葉ライフサイエンス協議会（KLS 協議会）」の活動として、5月、柏の葉に関わる関係分野の企業・研究機関・教育機関等が一堂に会する交流会「第2回 コウリュウノハ」を開催。前回を上回る217名が来場し、ポスター展示も51件と交流規模・内容ともに拡充が図られた。

先端研究の事業化にとりくむ研究者やビジネスパーソン等がビジネスや研究の拡大に寄与する関係性を構築することを狙った「サイエンスバー」を、昨年度に続きUDCKにて3回開催した。

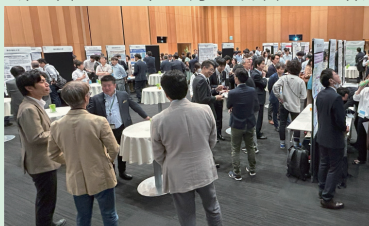
また、アステラス製薬が取り組む、医療資源が有効に使われる社会の実現を目指す「医療のエコ活動」の推進にも取り組まれた。KOIL 会員とのラウンドテーブルのほか、特に力を入れている次世代を担う子どもたちへの啓発活動の一環として、KOIL 会員と連携したイベントが複数開催された。

第2回コウリュウノハ

- ・日時：2025年5月20日(火) 18:00～
- ・場所：柏の葉カンファレンスセンター

柏の葉サイエンスバー

- ・第4回 2025年7月23日(水) H.U. グループ中央研究所・阿部公一氏・山根瑛子氏
- ・第5回 2025年9月17日(水) HiLung 株式会社取締役・鈴木敏夫氏
- ・第6回 2025年11月17日(月) LiSTie 株式会社 CEO・星野毅氏



▲第2回コウリュウノハ



▲医療のエコ活動 イベント

■メディカルデバイス・イノベーション | 国立がん研究センターほか

- ・日時：2025年10月29日(水) 16:30～19:40
- ・会場：柏の葉キャンパス・KOIL 6F ※オンライン同時配信 (zoom)
- ・定員：80名 (先着順)
- ・主催：国立がん研究センター東病院、中小企業基盤整備機構 関東本部、TX アントレプレナーパートナーズ、千葉県
- ・後援：厚生労働省、経済産業省、柏市、公益財団法人 千葉県産業振興センター

第9回目を迎えた今年度、新たに千葉県が共催に加わり、国立がん研究センター東病院、中小機構、TEP、柏市、千葉県の5者による初の連携プログラムとなった。

6. 新領域創成科学研究科 産学共創推進室

東京大学大学院新領域創成科学研究科は、産学協創の促進を目的として「第2回 企業と研究者との交流イベント」を開催した。本イベントは、機械・システム・情報・AI分野を中心に、研究成果や技術シーズを企業へ紹介し、社会課題解決およびイノベーション創出の契機とすることを目的とする。当日は、会場・オンラインを合わせて約100名が参加し、教員によるピッチ発表およびポスターセッションを通じて、活発な情報交換とネットワーキングが行われ、参加者アンケートでは高い満足度が得られた。

企業と研究者の交流イベント

- ・日時：2025年11月5日(水) 15:00～19:00
- ・場所：柏の葉カンファレンスセンター
- ・主催：東京大学大学院新領域創成科学研究科 産学協創推進室

7. 企業・研究機関立地のアセット提供

■ KOIL BASE の開設

2026年2月15日、柏の葉キャンパス駅前に、KOIL シリーズの新たな拠点となるオフィスビル「KOIL BASE」が開設された。「ハードテックの未来を実装するベース」をコンセプトに掲げ、モノづくり企業の集積と産業創出を目的とした拠点である。



▲竣工した KOIL BASE

■ こんぶくろ大街区における土地利用条件の整理

国立がん研究センター東病院周辺エリアをライフサイエンス拠点とし、企業・研究機関の誘致を図るべく、こんぶくろ大街区における都市計画変更提案とこれに基づく手続きが進められた。並行して、周辺住民にも配慮し、良質な開発を誘導するための「まちづくりビジョン」「まちづくりガイドライン」を策定した（目標⑦参照）。

今後の課題と展望

「スタートアップ戦略」に基づく支援体制が整いつつある一方、スタートアップに係る支援環境は国内外で大きく充実し、地域間競争も増している。柏の葉の強みを生かしたより実効性のある施策を、関係者の緊密な連携で推し進める必要がある。

ライフサイエンス分野のコミュニティはKLS協議会を中心に拡大・活性化している。柏の葉における新産業創造の中核分野として、地域との連携も図りながら企業集積と研究開発、人々の暮らしがつながった取り組みを進める。SMCの拠点施設が2026年4月に本格開業。駅前ではKOIL BASEもオープンした。ハードテック分野での共創環境の構築もテーマとなる。こうした状況を受け、次年度、アカデミア・スタートアップ・大企業が連携してイノベーションを生み出す新たな仕組み（柏の葉共創機構）が構築される予定である。国の新成長戦略と政策も見据えながら、柏の葉が産業創造の拠点としての位置づけを獲得すべく、広域で連携したビジョンを描き、体制を強化する。

次年度以降の重点課題

- ▶アカデミア・大企業・スタートアップが連携した共創環境の強化
- ▶ライフサイエンス分野を中心に、広域的な産業創造拠点としての戦略構築と国の施策とも連携した位置づけの獲得

目標3 国際的な学術・教育・文化空間の形成

2023年に英国の名門校 Rugby School Japan が開校。多くの生徒や外国人教職員が暮らし始めており、海外からの居住者やワーカーが暮らしやすいまちづくりへのニーズは高まっている。

こども対象の教育・体験プログラムについては、かつて UDCK がまちのプロモーションも兼ねて企画・主催してきた「未来こどもがっこう」や「ピノキオプロジェクト」は休止しているが、地域団体等による独自のプログラムが生まれている。また、コミュニティスクール事業とも連携しながら、地域の大人たちが小中学校や高校の教育活動に協力・連携する取り組みも拡大し、まちぐるみでこどもたちを育てる文化が醸成されつつある。

都市環境デザインスタジオをはじめ、千葉大学のランドスケープ演習も3年目を迎え定着。学校や地域を超えて、柏の葉をフィールドにした研究活動や実践型演習の受け入れも増えている。

1. 地域環境の国際化 外国籍者の生活環境や交流機会

■国際化部会

留学生や外国籍研究者ならびにその家族の生活環境を整えることが、国際学術研究都市の実現には欠かせない。2023年度の Rugby School Japan (RSJ) 開校を受け、今後も外国籍教職員の増加が見込まれる。優れた技術系スタッフをグローバルに確保するスタートアップ等の企業を誘致・育成していくうえでも、まちの生活環境の国際化はますます重要となっている。

今年度は、外国籍住民が「受け手」ではなく地域共創の担い手となるコミュニティ基盤の構築を目標に据え、改めて柏の葉に暮らす外国籍者の暮らしに係る課題把握を行うとともに、アクションプランを検討し、次年度以降の実装につなげることをねらいとした。

第一段階として2025年5～7月にRSJや東京大学の協力を得てアンケート調査を実施し、108件の回答を得た。明らかになった課題をさらに深掘すべく、第二段階として11月に3回のグループインタビューを実施した。その結果、①イベント等の情報発信が一元化されておらずアクセスが困難であること、②医療・行政サービスの言語障壁がなお大きいこと、③災害発生時の通知や避難等の手順についてガイダンスが不足し不安があること、④日本語学習の希望はあるものの機会が不足していること、⑤スポーツなど共通の趣味を通じた交流機会がなくコミュニティ形成が困難であること、⑥子供の運動スペースや魅力的な飲食店など生活インフラが十分でないことなどが明らかになった。

これらを受け、短期から中長期までのアクションプランを作成。その手始めとして、外国人コミュニティの構築に向けて2026年3月13日に KOIL TERRACE の6階ラウンジにて、インターナショナルナイトを開催した。



▲インターナショナルナイト

2. 子どもを対象とした学びのプログラム

■小中学校の学習プログラムとの連携・支援

小学校低学年の地域学習の一環として、今年度は富勢小学校の三年生(6月5日)、土小学校の三年生(6月11日)ならびに柏の葉小学校の二年生(10月10日)の校外学習ツアーをUDCKで受け入れた。柏の葉中学校の探求学習は、今年度から既成の教材を使ったプログラムとなり、企業のミッションを体現する具体策を地域から募集したメンターが伴走しながら考えるものとなり、全国大会に出場するレベルの高い提案も生まれた。同じく柏の葉中学校にて毎年実施している職業講話(2026年1月30日)では、今年度実証を進めた「まちスク」も活用(目標8参照)。地域の様々な職種の方から話を聞くことができ、満足度が高かった。

■夏休み自由研究フェス“スマートシティと夏休み” | UDCK

柏の葉で活動する方々の協力を得て、子どもたちにこのまちでしかできない学びと体験の場を提供すべく、昨年度夏休みと冬休みに小学生自由研究フェスをUDCKにて企画・開催した。2025年度も夏休みにプログラムを実施。公募によって市民、企業、行政を含む21団体から、まちツアー、自然や環境学習、科学実験やクラフト、歴史、手話など様々な分野のプログラムが集まった。専用サイトを作成し発信したほか、小学校でもチラシを配布。昨年度の倍となる約600名が参加し、参加者・協力者双方にとって新しい出会いや学びが生まれる機会となった。

スマートシティと夏休み

- ・期間：2025年8月4日(月)～2025年8月8日(金)
- ・場所：UDCK、KOIL、KCC、京葉ガス、チコル
- ・参加者数：約600名
- ・参加団体・企業：計21団体



▲スマートシティと夏休み(左：柏の縄文土器、右：手話)

■柏の葉高校 ハレかしぜみ | NPO 法人キャリア base

県立柏の葉高校の1年生普通科280名が探求授業として取り組む街文化祭を今年も実施。4月18日から12月5日までの全15回にわたるプログラム。「地域レクチャー」からスタートし、生徒たちでグループを組み、アイデアを出し合うワークを進め、2025年11月7日に柏の葉キャンパス駅前エリアでイベントが開催された。今年のテーマは「柏の葉一とでつながろう」。プログラムを通じて地域の課題と向き合い、地域の方々に日々親しんでもらえるような空間づくり・企画づくりに取り組んだ。



▲柏の葉高校 街文化祭の様子

■**柏の葉アントレプレナーシップツアー 2025** | UDCKTM ほか
次世代人材の育成と街の魅力発信を目的として、柏の葉をフィールドとし、高校生が社会課題解決型の探究活動を行う教育プログラムを実施。フィールドワークやアイデア創出、プレゼンテーションを通じて、社会で活用できる思考力や表現力を養う機会を提供することをねらいとしている。

・期間：2026年3月26日(木)～27日(金)
・主催：UDCKTM / 共催：RePlayce / 旅行企画実施：JTB / 協力：三井不動産
・参加者：高校生

3. 大学による教育プログラムとの連携

■**都市環境デザインスタジオ** | 東京大学・千葉大学・理科大学等
2006年度から続く、東京大学・千葉大学・東京理科大学・筑波大学が共同で実施する大学院生対象の都市デザイン演習である。昨年度に続き、柏の葉キャンパスエリアを対象に「交流を促すデザイン」を課題とした。10月～1月までのグループワークを通じて、植物を育てることで道端での交流を生み出す提案、自動運転の足湯バスがまちを巡る提案が生まれた。1月24日には恒例の公開講評会を実施し、住民や実務者と活発な意見交換が行われた。



▲都市環境デザインスタジオ公開講評会の様子

■**国際共同ランドスケーププロジェクト演習** | 千葉大学
千葉大学大学院園芸学研究科の学生を対象とするランドスケープの演習を千葉大学柏の葉キャンパス内のグリーンフィールドを対象地として実施。今年度は8月25日～29日の集中プログラムとし、中国の深圳大学と共同で実施した。「Kashiwa-no-ha Creative Interface」をテーマに日本と中国の学生の混成による5グループがファニチャーのデザイン・製作を行い、作品は11月初旬まで約2か月にわたって設置された。10月22日に開催された講評会には住民や近隣施設関係者などが参加し、意見交換と交流が行われた。



▲国際共同ランドスケーププロジェクト演習講評会の様子

■地域外の大学のフィールド型演習への協力

大学教育においても、社会課題を題材にした実践的な学びのニーズが高まっており、そのフィールドとして柏の葉エリアが選ばれ、協力する事例も増えている。今年度は、早稲田大学のデザイン思考演習プログラム「SHIP」や、麗澤大学のデザイン思考を学ぶ授業に対して、UDCKとして協力し、まちづくりの概要説明や課題提示などを行った。

■柏の葉探究・研究エキスポ 2025 | UDCK、みんスタ

柏の葉をフィールドに異なる立場で行われている探究や研究の取り組みを共有し、分野を越えた対話の機会をつくることを目的として「柏の葉 探究・研究エキスポ 2025」を初開催した。5つの発表が行われ、学校や所属を超えた学びの共有がなされた。

・日時：2025年2月28日(土)
・場所：UDCK (柏の葉アーバンデザインセンター)
・主催：UDCK、みんなのまちづくりスタジオ
・協力：県立柏の葉高校、日立東大ラボ、豊橋技術科学大学、東京大学

■多様な農福連携に貢献できる人材育成プログラム | 千葉大学

多様な農福連携プログラムを企画・運営する知識・実践能力を持つ人材育成を目的に、千葉大学環境健康フィールド科学センターが2019年度から実施している履修証明プログラムで、2025年度は応用コース(4月～7月、10月～12月)が開講された。

11月22日には「農福連携シンポジウム」が開催され69名の参加を得た。千葉県が主催する農福連携に係る技術者研修も当センターで開催されるなど、県内における農福連携の拠点となりつつある。修了生を中心とした『柏千会』が運営する「ノウフクマルシェ」は、今年度5月25日、10月19日、11月3日の3回開催された。

5. 柏の葉エリアの立地機関の連携・交流と情報発信

■柏の葉地区交流会

柏の葉エリアに立地する学術・研究機関等のネットワーク形成や共通する課題への対応、情報発信等を目的に2002年から行われている交流会であるが、今年度は開催が見送られた。

■街まるごとオープンキャンパス 2025 | UDCK 他

柏の葉のまちを一つのキャンパスに見立て、10月～11月末の2ヶ月間で開催されるイベント・フォーラムなどを紹介するUDCKの広報連携企画。今年度も特設ウェブサイトに加えて、紙パンフレットも作成され、地域に広く配布された。

今後の課題と展望

今年度行った調査を通じて、外国の方々がストレスなく暮らせる地域環境づくりに向けて、現時点での課題を明確にすることができた。次年度以降、公・民・学が連携してアクションを具体化する必要がある。

こどもたちへの教育・体験に対する地域の方々や立地機関の強い協力体制がつくられてきている。今年度実証導入した「まちスク」の活用などにより、企画者・協力者の負担を軽減しながら、この環境を活かした豊かな学びの機会が多くの子どもたちに提供されるよう、仕組みづくりを進める。

社会課題に起点を置いた探究学習や実践型演習のニーズが広がるなかで、その対象フィールドとして柏の葉は高いポテンシャルを持つ。これらを支援するとともに、そのアイデアをまちづくりに還元する仕組みづくりも求められている。

次年度以降の重点課題

- ▶ 地域の国際化 / 外国籍者も暮らしやすいまちづくり推進
- ▶ 地域と連携した教育・体験プログラムを持続的なものとしていくための仕組みづくり
- ▶ 探究学習・実践型演習フィールドとしての受け入れ環境整備

目標4 サステナブルな移動交通システム

かつて先導的な交通システムの実証実験として実施した「マルチ交通シェアリング」「かしわスマートサイクル」は、事業化の目途がたたず終了するなど、交通系の取り組みは収束気味であったが、2019年度策定したスマートシティ実行計画では「行きたい場所に快適に移動できる」をテーマにモビリティを柱の一つに位置づけ、次世代型の交通サービス導入に向けた動きを活性化している。

その一環として2019年11月から営業運転実証実験として運行を開始した自動運転バスは車両並びに路側インフラを強化しながら運行を継続する一方、2021年度からスタートした経産省プロジェクトとも連携し、2025年度のレベル4実現に向けて技術開発と体制構築が進められてきた。昨年度からは国土交通省事業として、自動運転の導入に向けて走行空間の環境を整える実証も行われている。2025年度は、その最終年度としてレベル4運行が実現した。

柏ITS推進協議会では2023年度より全国初となる公道における走行中給電技術実証も行われており、注目を集めている。

昨年度、柏市内でスタートした民間シェアサイクルが今年度は柏の葉エリアにも展開。長年のブランクを経て、シェアサイクルサービスが復活した。

1. 自動運転バスの営業運転実証実験 | 柏ITS推進協議会ほか

■Cool4 インフラ協調型のレベル4実装

2019年11月より、東京大学のシャトルバスに自動運転車両を導入し、一日4往復（うち1往復は視察便）、営業運行実証実験を継続している。2022年度にはレベル4（特定条件下での完全自動化）実現に向け、コイト電工・IHI・日本信号の参画によりインフラ側のセンサー類（信号機連携、路駐等検知センサー）が設置、運用された。2021年度には経済産業省の補助事業に東京大学を中心とするグループが採択され、2025年度の混在空間におけるレベル4実装を目標に、インフラ協調型の自動運転システムの構築に向けた研究・実証が進められてきた（通称Cool4）。

2025年度は最終年度として、協調型システムの設計・実装・評価、データ連携プラットフォームの実装、テストベッドを活用した性能検討と改良、そして柏の葉地区での技術・サービス・事業性実証が進められた。2025年8月29日には、先進モビリティの中型自動運転バスが道路運送車両法に基づくレベル4車両認可を取得。2025年11月12日に、千葉県公安委員会から特定自動運行の許可を取得。さらに2025年12月9日に、千葉運輸支局から旅客自動車運送事業計画の変更認可を取得し、これにより、レベル4運行の制度的対応が整い、2026年1月13日よりレベル4運行が開始されることとなった。



▲オリジナルラッピングされたレベル4車両

柏の葉キャンパス駅—東京大学柏キャンパスを結ぶシャトルバス路線のうち、特定自動運行区間は一号近隣公園停留所から三井ガーデンホテル柏の葉パークサイド前（税関研修所）停留所までの約700mの区間である。車両はいすゞのエルガミオで、最高速度は40km/h、一般道の混在空間での運行を前提としている点に特徴がある。東京都市圏の公道としては初の事例となった。

1月13日には、東京大学柏キャンパスにて出発式が行われ、その後、火・水・木の自動運転便がレベル4で運行された。2月には市民向けの試乗会も4回（2/17,18,21,24）開催。大変多くの応募があり、抽選となるなど関心の高さがうかがえた。また、市民向けのグループインタビューも2月3日に実施された。

経産省事業としてのレベル4運行は、2025年度末をもっていったん終了する。次年度以降もレベル4での実証運行を継続すべく、検討が進められているところである。



▲自動運転バスの運行区間

■自動運転のための走行空間実証

路上駐停車がある場合、これを回避すべく自動運転車両がしばらく停止したり、手動運転へ切り替えが発生するなどの課題があった。一般車両も混在する道路空間における自動運転バス運行の安定性及び円滑性向上に向け、路上駐車を抑制する注意喚起サインの設置や交差点の路面標示改良の有効性を検証すべく、昨年度に引きつづき実証実験が行われた。

- ・実施期間 : 2025年11月から2026年2月まで
- ・実験場所 : 柏の葉キャンパス駅～東京大学柏キャンパス間
- ・実施内容 :
 - ①自動運転バス運行をお知らせし、路上駐車の抑制等につなげる
 - ・路面標示の設置 / 運行ルートを示すカラー線の設置
 - ②自動運転バスがスムーズに走行できるよう
 - ・ゼブラゾーンの消去
 - ③左折車を左側車線に誘導するための
 - ・交差点内ゼブラの形状変更 / ドット線の設置



▲自動運転バスの走行路を周知するためのカラー線とアイコンの設置

今年度実証では、駅前から東京大学まで自動運転車両が走る全区間において、一般車への周知を目的とした緑色のカラー線を連続的に設置した。しかし、通常見慣れない路面標示であるがゆえに、この道路を使う市民より、わかりにくい、混乱するといった声が寄せられた。そのため、カラー線は、柏の葉キャンパス駅前通りだけ残し、その他は今年度中に消すこととなった。

2. 公道における走行中給電技術実証 | 柏 ITS 推進協議会ほか
柏 ITS 推進協議会新車両検討部会（部会長：東京大学 藤本博志教授）が柏の葉地区で実施する、電気自動車への走行中給電技術の実証実験の取り組みが、国土交通省が公募する「道路に関する新たな取り組みの現地実証実験（社会実験）」に採択され、2023 年度から柏の葉キャンパス駅西口駅前線の都市軸道路との交差点付近の路面下に送電コイルを埋設し、専用車両による実証実験が開始されている。

本実証は 2025 年 3 月で終了することとなっていたが、修復期日を 1 年延伸して 2025 年度も継続してデータ取得が行われてきた。新たに、活動原資として東京大学大学院新領域創成科学研究科の「走行中給電工学社会連携講座」の学内補助を確保することができたことから、あと 5 年（2030 年度まで）の継続が決まった。

3. 柏 ITS 推進協議会 | 柏市、東京大学ほか
「柏 ITS 推進協議会」は、昨年度まで会長を務められてきた須田教授の退官に伴い、新たに大口教授が会長に就任。部会を 5 つから 4 つに再編した。「交通情報利活用部会」をいったん閉じ、代わりに「自動運転部会」を創設。また、昨年度から合同部会としていた東京大学の平岩准教授が部会長を務める二つの部会（中心市街地活性化部会ならびに公共交通部会）を「まちづくり・公共交通部会」として統合した。

柏 ITS 推進協議会			
企画部会	部会長	東京大学 大口 敬 教授	
自動運転部会	部会長	東京大学 中野公彦 教授	自動運転バス導入検討部会 部会長 東京大学 中野公彦 教授
まちづくり公共交通部会	部会長	東京大学 平岩洋三 教授	
新車両検討部会	部会長	東京大学 藤本博志 教授	走行中給電実証作業部会 部会長 東京大学 藤本博志 教授

▲柏 ITS 推進協議会の部会構成

4. シェアサイクル "HELLO CYCLING" の導入
柏市は、市民の利便性向上と市内の回遊性を高めるため、2025 年 2 月 5 日よりシェアサイクルサービス「HELLO CYCLING（ハローサイクリング）」を導入した。当初は柏駅周辺でスタートしたが、早期の柏の葉エリアへの導入に向けて、ポート設置位置の調整やポートの看板（サイン）のデザイン協議などを進め、2025 年 9 月 1 日より柏の葉エリアにおいてもサービスがスタートした。2026 年 2 月末時点で、現在市内全体でポートは約 130 箇所。柏の葉エリアは当初 23 箇所からスタートしたが、その後 7 箇所を増設し、30 箇所での運用となっている。

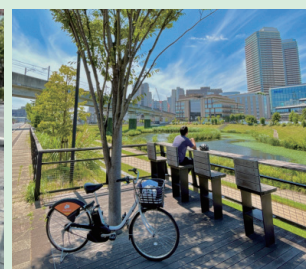
近隣エリアでは、柏の葉キャンパス駅までの移動などを想定し、松葉や柏ビレジにも追加でポートが設置された。利用実績として、柏市内全利用のうちの約 3 割が柏の葉エリアでの利用で、かつほとんどが市外に出ず市内間で返却されている。東京大学関係者による、柏の葉キャンパス駅～東京大学間の利用が大半であり、その他国立がん研究センター東病院前から柏の葉キャンパス駅、柏の葉キャンパス駅から松葉団地方面への利用がある。これらの区間にはいずれもバス路線があるため、バスに代わる交通手段としての利用と考えられる。サービス開始時から利用者は約 2.5 倍に増加しているが、冬季は利用者がやや減少傾向である。



▲柏の葉キャンパス駅周辺エリアにおけるポートの位置（2026 年 3 月）



▲景観配慮型のオリジナルデザインポート



▲PRムービーの一場面

今後の課題と展望

長年の目標であった混在空間におけるレベル 4 の自動運転バス運行が東京圏初というかたちで実現したことは今年度の大きなトピックであるが、全区間レベル 4、無人運行の実現に向けて超えるべきハードルはまだまだ多い。経産省事業は終了したが、その実現に向け次年度以降も運行を継続することが望まれる。民間シェアサイクルが導入され、ポート数も着実に増加しており、自転車利用環境は強化された。マルチモーダルでストレスなくアクセスおよび回遊できる、次世代型交通ネットワークの将来像を関係者で共有し、持続的なサービス基盤をつくるとともに、データ管理やサービス連携を含めた交通マネジメント体制を構築していくことが望まれる。

次年度以降の重点課題

- ▶自動運転バスレベル 4 の実証運行の継続に向けた体制構築と特定自動運行区間の拡張
- ▶自転車やパーソナルモビリティの走行環境・利用環境の整備
- ▶ITS 推進協議会を中心とした交通マネジメント体制の構築

目標5 健康を育む柏の葉スタイルの創出

まちの健康研究所「あ・し・た」は、2014年の開設以来、「あるく・しゃべる・たべる」に関わる情報提供や、さまざまなイベント・講座等を通して、参加型健康づくりを推進している。柏の葉スマートシティプロジェクトでは、「ウェルネス」を一つの柱としており、「日常生活の中で健康を維持できる」をテーマに、2020年11月から「スマートライフパス」を介した個人の健康データを活かしたサービスが展開。「あ・し・た」というリアルな場と「スマートライフパス」のデジタルサービスの連携により、暮らすだけで健康になるまちづくりを推進している。

2023年度からは、株式会社明治との「ヨーグルトで街にミライをプロジェクト」がスタート。企業商品を活かした様々なプロジェクトを柏の葉をフィールドに展開し、住民の健康増進活動を支援する新たな試みとなっている。

農や食に係るプロジェクトとして、柏たなかエリアでは「農あるまちづくり」をテーマに各種体験プログラムが継続されている。開発フェーズが終わるなかで、地域が主体となった持続的な仕組みへの移行が求められており、今年度も様々な試行を実施した。

1. まちの健康研究所 あ・し・た | 三井不動産ほか

まちの健康研究所「あ・し・た」の2026年2月末の会員数は3,900名を超え、現在も毎月10名程度の新規登録がある。

2014年の設立以来、「あるく・しゃべる・たべる」を通じた健康づくりにつながるサービスを原則無料で提供していたが、「あ・し・た」そのものの運営自立化も視野に、自己実現につながる有料体験（スマホ教室、スキンケア講座、ファッション講座、酸素カプセル、e-スポーツなど）が、持続可能な事業として成立するか、2ヶ月にわたり検証した。有料イベント・講座には延べ127名が参加し、満足度は高く一定の成果は得られた。しかし、利用者数は当初想定よりは少なく、無理なく持続的に実装してゆくことは困難との判断から、従来どおり無料サービスの提供を継続することになった。ニーズが高いことが認められたスマホ教室は無料で、酸素カプセル・e-スポーツは有料で継続する。

実証実験関連では、今年度も株式会社明治の「ヨーグルトで街にミライをプロジェクト」、東京大学の「Fitbitと生成AIを活用した健康習慣形成の実証実験」に協力しており、半年にわたる東大の実証実験には会員200名程度が参加中である。

ウォーキングステーションの利用者は30～40名/月を維持しており、定番の運動・食・美容アドバイスに加え、ミニ遠足、おりがみさろん等のイベント、近隣の整骨院やコンディショニング施設による無料講座も継続して開催している。柏市との連携により、乳幼児と保護者向けのはぐはぐひろば・ふれあい親子広場わいわい、柏市リサイクルセンターの出張リボン館などが、定期的に開催されている。民間の学童保育「あおぞらルーム」にもスペースを提供し、乳幼児から高齢者まで幅広い世代に利用されている。

□おとなの寺子屋「能登は今...」（被災後の能登の現状に関する講演会）
・開催日：2025年12月13日(土)

・参加者：24名

□食のミニ講座 味噌作り

・開催日：2026年2月19日(木)、24日(火)

・参加：15名×2回＝30名

□ミニ遠足 白みりんミュージアム見学・体験

・開催日：2026年3月5日(木)、11日(水)

・参加者：10名×2回＝20名



▲食のミニ講座 味噌作り



▲白みりんミュージアム見学・体験

3. スマートライフパスと関連サービス | UDCKTMほか

健康増進・疾病予防に有効なサービスを全国に提供するために柏の葉・柏市全域で2020年11月に柏の葉スマートシティで稼働、現在全国の自治体へ拡大展開中。日本全国の自治体がプラットフォームを通じて繋がることで、他自治体の課題から生まれたサービス・アプリを拡充予定である。AI活用による健康アドバイスを提供する「カロママプラス」、パーソナルフィットネスアプリ「Beatfit」、バイタルデータ管理サービス「Health Data Bank」、医療従事者による健康相談ができる「MedicalNote」、ベビーシッター・家事代行マッチング支援の「KIDSLINE」、デジタル施策支援サービス「マイグル」など多様な提携サービスを提供している。（目標8参照）

4. ヨーグルトで街にミライをプロジェクト | 明治、UDCKTM

株式会社明治とUDCKタウンマネジメントにより、『ヨーグルトで街にミライをプロジェクト』が2023年度にスタート。柏の葉をフィールドに企業の知見や商品・サービスを取り入れて、住民の健康増進活動の実践を推進しようというもの。「ウォーキングルト」に加えて、今年度新たに自身の健康状態を可視化する「チェックキングルト」を開始。また、千葉大学予防医学センターとの共同研究「ウェルビーイングルト・リサーチ」が開始された。

■ウォーキングルト

ウォーキング方法の指導と、ヨーグルトをはじめとした適切な栄養補給の方法や水分の摂り方の紹介を組み合わせたプログラム。毎月2回のイベント型開催に加え、ミッション達成によってヨーグルトがもらえるスタンプラリー型も開始した。

■チェックキングルト

骨密度測定や腸内環境のセルフチェックなどを通じて、自身の健康状態を可視化し、気づきを促すプログラム。LINEやQRコードを活用したデジタル連動により参加履歴や回遊行動を蓄積し、効果的なインセンティブ設計を通じて継続参加を促す。

■ウェルビーイングルト・リサーチ

ヨーグルトをきっかけとした健康増進活動が住民およびまち全体のウェルビーイングに及ぼす影響の実証研究。身体的健康のみならず、他者とのつながりや主観的幸福度といった側面も含め、「からだ」「つながり」「ウェルビーイング」の三つの観点から総合的に評価する。



▲ウォーキングルト



▲チェックキングルト

5. 柏たなか農あるまちづくり | 農あるまちづくり実行委員会

「農あるまちづくり実行委員会」(委員長 野田勝二 千葉大学講師)を中心に、農業体験農園の運営や収穫祭等のイベントを支援している。これからの時代における農や食の価値を再評価し、持続的にこれらの活動を定着させていくべく、各取組の内容や実施体制を工夫しながら、様々な試行を実施した。

■体験農園支援

2024年度まで運営されてきた3園のうち1園(四季彩菜クラブ高妻)が2024年度末をもって閉園となり、2025年度は2園67区画で運営された。うち1園(ジョイ・ファーム岡田)も2026年度をもって閉園する意向が示され、次年度の新規募集は行わなかったため体験農園・宝珠のみで15区画の新規募集を行い7区画の応募があった。2園の継続利用者とあわせて、次年度は57区画で運営される見通しである。

この体験農園の事業は地区に残る生産緑地の保全・継承を目的としたものであるが、園主の高齢化等によって閉園が続く。昨年度行ったアンケートに基づき、新たな体験農園の開設可能性について、地区の農家へのヒアリングを行ったが、開設にはいたっていない。今後のあり方を検討する必要がある。

■サークル活動・環境コンビニ運営

農あるまちづくりの活動拠点として柏たなか駅前公園内に設置・運営している「環境コンビニステーション」を、地域活動の場、ひいてはコミュニティ形成の場としてより有効に活用すべく、利用に係る規約を改定し、より多くの団体利用を受け入れた。一方、環境コンビニの運営に係わる公的財源は削減が見込まれることから、より自立した拠点運営に向けて、今年度も地域サポーターによる閉館時活用の実証「みんなのおへや」を年間を通じて継続しており、地域に定着しつつある。

■イベント

実行委員会のイベントとしての「朝市」は昨年度をもって終了。柏たなか商店会が主催する夕涼み会、収穫祭(柏たなか Autumn マルシェ)などのイベントは盛大に開催されたほか、今年度新たに星空観察会も開催された。

- 夕涼み会 : 7月19日(土) 17:00~20:00 (20店舗 来場者4823名)
- 星空観察会 : 10月2日(木) 18:10~20:30 (参加者33組130名)
- Autumn マルシェ : 11月22日(土) 11:00~15:00 (41店舗 来場者1025名)

■公園内菜園・花壇

駅前公園内の菜園2区画と花壇2区画の管理を継続した。菜園ではキャベツ、スイカ、トウモロコシ、サツマイモ、枝豆、カブ、ネギ、ハクサイ、ダイコンを栽培し、年間を通じて収穫体験を開催。サポーターとともに活動を行った。

花壇は、運営体制が不十分で満足に維持ができていないことから、区画を1区画に絞ることとし、残り1区画において土いじりスペース、ひまわりの播種など手間をかけない運用を試行した。



▲閉館時利活用実証「みんなのおへや」 ▲ダイコン収穫体験 (12/21)

■農業体験ツアー

「農あるまちづくり」の持続化に向け、参加費のみで運営する農業体験ツアーの実現可能性を探る企画を検討。昨年度からさらに企画を増やし10のツアーを実施した。運営体制もスリム化され、事務局スタッフの人件費を除けば毎回黒字となり、年間で7万円程度の活動費を生み出せる事業となった。

- 田植え体験 : 5月18日(日) (34組113名)
- かぶ・大根・玉ねぎ収穫体験 : 6月7日(土) (19組)
- じゃがいも収穫体験 : 6月21日(土) (6組) / 6月29日(土) (5組)
- にんにく収穫体験 : 7月5日(土) (12組39名) / 7月6日(日) (10組41名)
- 稲刈り体験 : 9月28日(日) (36組125名)
- 栗拾い体験 : 10月12日(日) (24組)
- 落花生収穫体験 : 10月19日(日) (14組)
- 小松菜・チンゲンサイ収穫体験 : 10月25日(日) (20組) / 11月2日(日) (2組)
- 冬野菜収穫体験 : 11月30日(日) (12組)
- 餅つき体験&ライスセンター見学 : 1月25日(日) (18組65名)

加えて、一定の運営費拠出を前提とした体験プログラムとして、「農あるピクニック」を引き続き開催。農業体験、旬の野菜の調理体験、公園内でのピクニックランチを通じた「農と食のコミュニケーション」を盛り込んだパッケージ企画として、6月と3月の2回実施した。

- 農あるピクニック(じゃがいも) : 6月29日(日)
メニュー: 野菜たっぷりポテトサラダのサンドイッチ・旬のスムージー
- 農あるピクニック(キャベツ) : 3月22日(日)
メニュー: ロールキャベツ・コールスロー・旬のスムージー



▲餅つき体験 (1/25)

▲農あるピクニック (6/29)

今後の課題と展望

まちの健康研究所あ・し・たは多様な世代の暮らしと健康を支える場として、健康に係る実証実験や研究の拠点として、重要性を増しているが、プログラムの有料化はいったん見直しとなり、その持続的な運営については継続課題となっている。

スマートライフパスを活用したサービス創造やライフサイエンス拠点化構想に基づく研究開発が活発化するなか、先進的な健康関連プロジェクトと地域住民の暮らしや健康をリンクさせ、双方にとってメリットのあるものとしていくための「ビジョン」策定や体制の整理を引きつづき進める必要がある。

柏たなか農あるまちづくりは、地域との連携が進み協力者も徐々に増えているが、経営の面、仕組みの面において、運営の自立化はなお模索中である。千葉大学環境健康フィールド科学センターをはじめ、まちのなかや近傍に農地や農に係る研究拠点があるポテンシャルを活かし、農の体験や食育など、食の面から健康を支えるプロジェクトを柏の葉キャンパスエリアも含めてさらに充実していくことが重要である。

次年度以降の重点課題

- ▶まちの健康研究所あ・し・たの持続的運営体制の構築
- ▶健康まちづくりに係わる全体ビジョンの検討
- ▶地域の農業や食に係る活動推進と魅力発信(柏の葉・柏たなか)

目標6 公・民・学連携によるエリアマネジメントの実施

2019年1月に設立された(株)UDCK タウンマネジメント (UDCKTM) が柏市と協定を結び、柏の葉キャンパス駅周辺の歩道・植栽と柏の葉アクアテラスの管理運営を担っている。キャンパス駅周辺では、市民団体による花壇管理が行われ、柏の葉キャンパス駅前まちづくり協議会による清掃活動も継続している。

マルシェ・コロールやハロウィンなど市民有志や地域団体等による地域イベントも活発化している。音楽やスポーツに係る活動やイベントも増えつつある一方で、まだまだ活動場所は限られている。まち全体としてこれらをサポートし、成熟しつつある柏の葉のまちに文化的な活動が生まれ育ちやすい環境をつくるためのコミュニティづくりも進められている。

「柏の葉地域ふるさと協議会」「柏の葉キャンパス駅前まちづくり協議会」をはじめ、多様な地域団体や市民有志の活動は活発化しており、まちを支え、盛り上げていく力として期待されるものの、活動場所や支援体制を含め、地域活動の環境は未だ十分とは言えない。2025年9月に待望の近隣センターの整備が柏市により発表され、参加型の計画検討がスタートした。UDCK では引きつづきプロジェクト連携会議やKサロン等を開催し、地元住民や市民団体間の情報共有や交流を行っている。

1. 柏の葉キャンパスエリアの公共空間管理 | UDCKTM

■柏の葉キャンパス駅西口

毎年夏季の課題であるムクドリ対策としては、これまで同様に交通島内にムクドリを集める戦略的剪定を行ったほか、臭い対策として有志による清掃を行った。秋口にはムクドリの数が増え、被害が顕在化したため、有志による追払いも実施。共存を理念とする対策にも限界が生じており、次年度は追払いにも力を入れる方針である。駅西口では11月3日にマルシェ・コロールが開催されたほか、柏の葉高校一年生が主催するイベントが今年はアクアテラスから駅前に場所を変えて実施され、賑わいを見せた。毎年恒例のイルミネーション (Lights of Nature) は10月末～3月末まで実施された。

■柏の葉アクアテラス

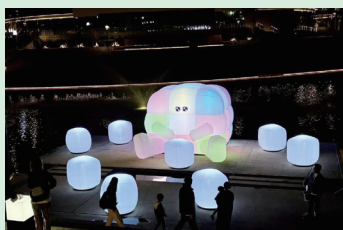
アクアテラスは今年度後半、改修工事が行われ閉鎖。あわせて水際等に繁茂していた植物についても外来種の駆除などの再整備が行われた。改修工事の完了を受け、3月28～29日にはアクアテラスを中心とした参加型のお祭り「イノベーションフェス」が開催された。

■イノベーションフェス

今年度の「イノフェス」は、まちからはじめるイノベーションをテーマに、市民にターゲットに絞り、来街促進・回遊創出・地域参加拡大をねらいとして3月28～29日にアクアテラスを中心に開催した。まちバルウォーク、体育祭コンテンツ、人力車体験、ビジネスアイデアコンテスト (ハツメイノハ)、音楽祭、サイエンス企画等多様なコンテンツで実施された。



▲市民による花壇活動の再開



▲イノフェス YAKEI ちゃん

■花壇の管理

柏の葉キャンパス駅周辺の花壇については、柏の葉キャンパス駅前まちづくり協議会が資金を負担し、二つの市民団体「かし＊はな」「花山会」が管理を担ってきたが、昨年度末で「花山会」が解散。高架沿いの多くの花壇は十分に手入れされない状況が続いており、今後の体制構築に向け、昨年度まちづくり協議会にてアンケートを実施。参加意欲のある住民が多いことがわかったため、5月に16Gateの花屋 Re:Flower 加藤氏を迎え、(仮称)花壇づくり住民の会が発足。花壇活動再開キックオフ会や夏場の除草イベント、土づくり＆花の植え替えイベント等を実施しながら、これまでとは異なる住民主体の緩やかな花壇活動体制の構築を目指し、活動を続けている。

2. AIカメラの運用 | UDCKTM

まちの安心・安全性向上のため、スマートシティプロジェクトの一環として、柏の葉キャンパス駅周辺の既存の街灯にAIカメラを計29台設置し、2021年9月より運用している。異常行動 (倒れる、うずくまる、凶器所持等)、アクアテラス (閉鎖時) への立ち入り検知、人流解析を実施しているが、異常行動検知については、検出精度や駆けつけ体制等の問題から本格運用に至っていない。

3. スポーツを活かしたまちづくり

柏の葉エリアではこれまで、スポーツチームとの連携を通じた地域活性化・ブランド価値向上を目指し、個別の広報協力やイベント連動を実施してきた。2025年度は、三井不動産がNEC グリーンロケット東葛、柏レイソルとのプロモーションパートナー契約を締結。スポーツとまちづくりを接続するモデル構築、スタジアム来場者のまちへの誘導、柏の葉＝スポーツと共創するまちというブランド強化を狙いとして取組を推進。12月3日の明治安田J1リーグ・柏レイソルのFC町田ゼルビア戦にて、「スタまちツアー in 柏の葉《柏の葉探訪してから日立台に行こう!》」を開催し、スタジアム来訪者の柏の葉への回遊促進を図った。

4. ふるさと協議会とまちづくり協議会

■柏の葉地域ふるさと協議会

2020年に設立されたふるさと協議会活動も6年目となり、活動も活発化している。5月には会長が交代し新体制に移行。9月に近隣センターの計画が公表されると、ふるさと協議会では住民アンケートの実施を行いながら地域の声を集約し、検討協議会を通じて地域に求められる機能の提示などを行った。毎年恒例のクリスマス花火は今年度は12月20日に実施された。

■柏の葉キャンパス駅前まちづくり協議会

美化緑化部会では、月三回の駅前清掃を行っている。また、駅周辺花壇活動について、上述の活動を予算面・広報面から支援した。防災安全部会では、恒例の防災施設見学ツアーを1月30日(土)に実施。抽選で選ばれた約40名が参加し満足度の高いイベントとなった。健康福祉部会では、まちの健康研究所「あ・し・た」の協力も得て、6月21日(土)に親子向け防災イベント、2月21日(土)に講演会「いざというとき役に立つ応急手当のいろは」を開催。その他、市民団体等によるイベントに対する協賛を通じて、まちの交流促進を図っている。

5. 市民団体・地元事業者による活動支援

毎月最終月曜日に UDCK プロジェクト連携会議を開催し、イベント実施者、施設管理者などとイベント報告と次月度以降の予定を共有する場を設けている。そのほかにも、交流会「K サロン」の開催、ポータルサイト「柏の葉ナビ」や SNS など各種メディアを使った情報発信・連携を行っている。

■K サロン

UDCK 設立以来継続している月末水曜 19 時からのまちの交流会。まちのトピックに基づくテーマを各回設定し、ゲストスピーカーを招いている。今年度は千葉大学とのコラボを 2 回行ったほか、11 月には音楽をテーマにライブ形式で開催するなどの試みも行った。



▲K サロンの開催テーマ 2025 年度開催分の一部

■柏の葉街まるごとハロウィン 2025

保育施設「チコル」の発意により 2020 年より開催しているハロウィンイベント。今年はテーマを『つながる・ひろがる・ときめく』とし、10 月 25 日、26 日の二日間開催した。恒例のキャンデイスポットラリー（20 か所）やフォトスポットに加え、今年度はキッズパレードや地域ハロウィンブースも実施。スタンプラリー 1500 枚はすぐに定員に達した。二日ともあいにくの雨で、パレード等の場所を急遽変更するなどの対応はあったが、多くの参加者で賑わった。

■夏休みラジオ体操

2021 年より柏市青少年相談員連絡協議会等が主催し、夏休みのラジオ体操を開催している。今年度も 8 月 25 日から 30 日の 5 日間、朝 6 時半から柏の葉ラジオ体操を行った。地域に定着しつつあるこのイベント、今年も昨年に続きかしわのはらっぱで開催。各回平均 200 名の子ども達と保護者、柏の葉地域の住民が参加した。



▲柏の葉街まるごとハロウィン

▲夏休みラジオ体操

■ひかり隣保館 2025 柏の葉わくわくマルシェ

駅前から少し離れた福祉施設ひかり隣保館では 2023 年度から「わくわくマルシェ」をスタート。今年度第三回が 11 月 9 日に開催される予定だったが雨天で中止となった。11 月 29 日、社会福祉協議会主催の草取りイベントにあわせて、リベンジ開催された。

■マイ屋台プロジェクト | T-KIDS 株式会社

子どもたちが「好き」「得意」「やってみたい」から生まれたアイデアを「屋台」という形で社会に届け、社会とつながる体験をつくるプロジェクト。昨年度までは、マルシェ・コロールにあわせて屋台出展を行っていたが、今年度は初めて主催イベント「あそびのマルシェ」を 5 月 10 日にキャンパス駅前にて開催。11 月 9 日には、ららぽーと柏の葉全館「子どもたちのフェス」として使う「あそマルジャック」を開催した。

■スポーツマルシェ | 柏の葉スポーツコミュニティハブ

「まちをフィールドにスポーツでつながる」等をコンセプトに、まちなかを舞台に子どもから大人まで気軽にスポーツ体験ができる地域参加型イベントが、10 月 11 日市民有志により初開催。NEC グリーンロケッツや柏レイソルなども出展し広域から人を呼び込んだ。

・日時：2025 年 10 月 11 日(土) 10:00 ～ 16:00

・場所：ゲートスクエアプラザほか



▲マイ屋台 あそびのマルシェ

▲スポーツマルシェ

6. 情報発信とプロモーション

■ウェブサイトや SNS を通じた情報発信

通常のイベント開催情報は柏の葉ナビや UDCK の SNS で、共創に係るまちの動きや事例紹介は柏の葉スマートシティのウェブサイトや SNS で、まちづくり活動のアーカイブは UDCK のウェブサイトでも継続的に発信している。

■ロケーションサービス <https://www.kashiwa-location.jp/>

映像作品のロケーション撮影の支援を行い、柏の葉の PR を行うことを目的に、UDCKTM がロケーションサービスの HP を作成。柏市のフィルムコミッションと連携し、今年度もアクアテラス等でテレビドラマの撮影等が行われた。

今後の課題と展望

緑豊かな都市環境が柏の葉・柏たなかの魅力となっているが、公共空間管理に関わる官民の財源も限られるなかで、十分手がかけられていない箇所も顕在化している。継続的に緑を増やし、これらを適切に維持管理していくための体制・仕組みづくりに向け、地域活動の支援や新たな財源の獲得などによって、これらを進める必要がある。

学びや交流など様々な分野で地域活動が活発化しているものの、その活動を支える環境は十分とは言えない。こどもの安全や高齢者の暮らしを支える活動、防災活動など、地域の安全な暮らしを守る地域活動についても、ふるさと協議会やまちづくり協議会を中心に関係機関が連携し、また、柏の葉ならではの新たな知見や技術も取り入れながら推進することが求められる。近隣センターの計画がようやく進み始めた。地域で活動する方々が使いやすい施設となるよう、参加型での検討を支援する。活動団体どうしでの情報共有や連携体制について、次年度 20 周年を迎える UDCK の役割を整理しながら、これからの地域活動の体制や拠点のあり方を模索する必要がある。

次年度以降の重点課題

- ▶ 公共空間の質の維持管理の仕組み構築
- ▶ 公共と地元組織、企業が連携した地域課題の解決
- ▶ 近隣センターの設計フェーズにおける地域共創

目標7 質の高い都市空間のデザイン

柏の葉キャンパスエリアでは、空間デザイン部会並びに中核地区戦略部会において、公共空間の高質化協議や主要街区の開発に係る景観協議を行い、質の高い都市空間形成を推進している。今年度は、2号近隣公園、JSW 中央研究所、かけだし横丁リニューアル工事について空間デザイン部会での協議を実施した。また、新たに計画が公表された柏の葉地域近隣センターでは、設計者プロポーザルに協力するとともに、「みんなのまちづくりスタジオ」の仕組みをつかった参加型プロセスを取り入れ、議論を開始した。こんぶくろ池自然博物公園に囲まれた大規模街区において、研究施設等の誘致に向けた都市計画変更手続きが進められ、これにあわせて、環境保全や良好な空間・景観形成を誘導するためのまちづくりビジョン並びにガイドラインの検討を行った。

2024 年度にデザイン協議を行ったアクアテラスの再整備事業については、工事が進められ 2026 年 3 月に竣工。市民に開放された。また、千葉大学柏の葉キャンパスにおける「学園の道」のあり方について昨年度の準備期間を経て、主要関係者による会議を開催したもの、具体的な方針を定めることはできていない。

UDCK は景観整備機構として柏市の景観行政を支援しており、柏の葉キャンパス駅周辺等の景観重点地区における建築の事前協議や屋外広告物協議を担っている。今年度も地域密着型での景観マネジメントが進められた。

1. 景観協議 | UDCK、柏市

2016 年度から UDCK が景観整備機構として、景観重点地区の建築の事前協議や屋外広告物協議を担っている。今年度、UDCK では 35 件の景観協議を行った。種別では、屋外広告物 32 件、建築物 1 件、工作物 2 件という内訳である。SMC や KOIL BASE 等の新設の施設や、かけだし横丁のリニューアルに伴う広告物協議が相次ぎ、昨年の倍近い件数となった。区域の内訳はキャンパス駅周辺計 24 件、2 号調整池計 11 件であった。柏市による景観協議は計 4 件であり、全体の 100% の事前協議を UDCK が受けたことになる。その他、景観について事前相談があったものは、建築物 3 件、屋外広告物 7 件、工作物 2 件、対象外区域の景観ガイドライン 1 件であった。

■シェアサイクルポートのデザイン調整

新たに柏の葉エリアでサービスが始まった HELLO CYCLING のサイクルシェアのポートの置き看板について、景観重点区域内においては、通常の黄色を基調とした色彩ではなく、他の路上工作物で採用しているダークグレーを基調とした色彩となるよう調整し、オリジナルデザインの置き看板が設置された。

2. 開発に係るデザイン協議

| 空間デザイン部会・中核地区戦略部会

■株式会社日本製鋼所 中央研究所（仮称）

イノベーションキャンパス地区内の 136 街区に立地を検討する企業（日本製鋼所）との間で、先方が検討する研究施設の建築計画が、当地区のまちづくりビジョンに合致するかどうか事前相談を受け、過去の経緯を含めた土地利用条件との対応等について整理・助言を行い、立地が決定した。

その後、アクアテラスやガーデンストリート沿いの建築・外構デザインについてデザイン調整を行い、設計検討が進められた。



▲日本製鋼所 中央研究所（仮称）完成イメージ（出典：日本製鋼所リリース）

■かけだし横丁リニューアル工事

かけだし横丁メインサイドは屋外テラス席が気候や風雨の影響を受けやすく、特に冬場の利用が少ないため、本格的な防寒対策・風雨対策が必要な状況であった。また、バックサイドは各店舗がバックヤードや客席を確保するため、店舗毎に設えの異なるテント等を設置しており、景観の低下を招いていた。

これを受けて、季節や天候に応じて柔軟に利用できる客席空間の整備と、横丁らしい賑わいある景観の創出、駅前からイノベーションキャンパス地区までの開放的で賑わいのある歩行空間の形成を目指し、三井不動産にてかけだし横丁全体の改修が提案され、デザイン協議を行った。2 回の空間デザイン部会を経て、提灯や暖簾等温かみのあるアイテムや柏の葉をモチーフにしたアートグラフィック等の導入により、横丁らしい賑わい景観を創出するプランとなった。各店舗は営業を停止することなく、10 月からブロック毎に改修が進められ、12 月 3 日にリニューアルオープンを迎えた。



▲リニューアルされたかけだし横丁

3. 公共空間高質化に係るデザイン協議 | 空間デザイン部会

■2号近隣公園

昨年度まで議論を進めてきた「せせらぎの小径」の整備見送りにより、公園整備予算を地元から早期整備の要望が強い 2 号近隣公園の整備費用に充てることとなった。

2024 年 7 月より柏市公園緑地課にて町会や周辺住民に対し公園整備に関するアンケート調査を実施し、10 月にはプロポーザル方式で設計業者の選定を行い、株式会社テレウスを特定。昨年度の空間デザイン部会にて設計内容を協議すると共に、2025 年 3 ～ 5 月にかけて「みんなのまちづくりスタジオ」主催で広く市民の意見を募る WS「みんなでつくる あたらしい公園」を計 4 回実施した。今年度の空間デザイン部会では、市民の意見を反映させた整備計画について確認すると共に、舗装材やサイン計画について協議を行った。

これらのプロセスを経た設計のポイントとして、地域の意見を踏ま

え、要望が多かったバスケットコート等が設置されることとなったこと、ナチュラルガーデンの導入やクワの木ゾーンの植栽強化など、自然体験や季節感を感じられる植栽構成となったこと、総合案内サインで公園のコンセプトや整備の背景を伝える記載を加えることなどがあげられる。

また、管理は市が行うことを前提としつつ、将来的には地域住民やNPOの参画、民間事業者の導入（Park-PFI等）による公園活用の可能性について検討を進める必要があることが確認された。

2025年12月に着工されており、2026年4月の一部供用開始に向けて工事が進められている。



▲2号近隣公園の計画図

■アクアテラスのリニューアル

SMC Japan Technical Centerの建設と外構整備に伴い、当施設とアクアテラスとの境界部の取り合いを調整するとともに、アクアテラスの更なる高質化を図るべく、昨年度、アクアテラス再整備検討会議を発足。アクアテラスの当初設計を担当した日建設計、オオバも加わってデザイン検討が進められ、昨年度中に、法肩の歩道舗装や転落防止柵の高質化、SMC側オープンカフェと隣接する位置への張り出しデッキの新設、既存張り出しデッキの改修、法面の回遊動線の新設、法肩・水際の植栽更新など再整備内容が決定した。今年度は細部の設計調整を行い2025年7月に実施設計が完了。11月から改修工事に着工され、3月末に竣工した。先行して市民に開放されているSMC施設の外構部と合わせ、アクアテラスを中心とする豊かなパブリックスペースが拡張された。



▲アクアテラス 新設された張り出しデッキ

4. イノベーションフォレスト地区まちづくりビジョン

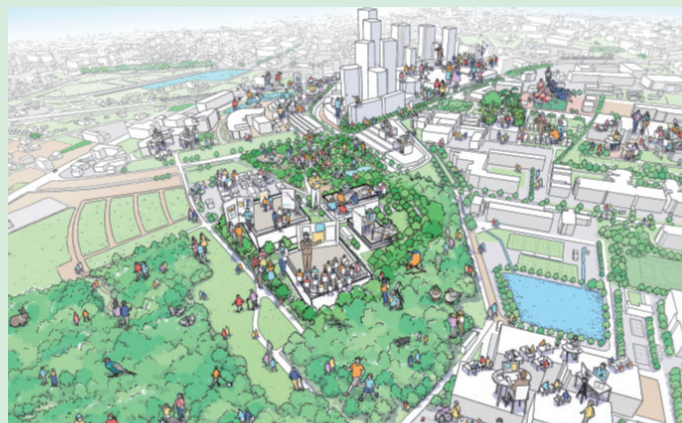
｜中核地区戦略部会

柏の葉キャンパス駅北西部の「研究開発型産業創出地区（403街区と118街区）」では、研究開発機能を中心とした新産業創出の受け皿づくりを進めている。一方、当街区は住宅系用途が指定されていたことから、一定程度の危険物等の取扱いも想定しうる先端産業の研究開発機能の誘致にあたって制約となる課題があった。

今年度は、こうした課題を解消しつつ、周辺の住環境・自然環境との調和を担保するため、近隣住民の方々への説明・対話を重ねながら、用途地域変更を含む都市計画の変更手続きが進められた。

あわせて、柏の葉国際キャンパスタウン構想を踏まえた土地利用・景観デザイン・自然環境配慮等の考え方を整理し、将来の施設整備における配慮事項を具体化することをねらいとして「柏の葉イノベーションフォレスト地区まちづくりビジョン」の検討・策定を進めた。デザインについて5つの基本指針が定められている。

- ① 森との一体性を創出するグリーンネットワーク
- ② 連続する森と潤いを感じられる歩きやすい歩行空間の創出
- ③ 森の中での多様な居場所や活動の場づくり
- ④ 地区全体の統一性と多様性を両立した景観づくり
- ⑤ 森の湧水を守る環境づくり



▲イノベーションフォレスト地区の将来イメージ

今後の課題と展望

2025年度、駅前149街区のKOIL BASEやイノベーションキャンパス地区のSMCなど、これまでデザイン調整を進めてきた施設が竣工し、次年度本格稼働を迎える。さらなる企業誘致に向け、こんぶくろ大街区のまちづくりの方向も定められた。

これらを受け、今後、柏の葉キャンパス駅東口の高質化、こんぶくろ池自然博物館付近における「緑園の道」のあり方検討を進める必要がある。「学園の道」に関わる五者会議を再開した。具体的な議論は進められていないものの、東京大学柏IIキャンパス側に新たに門が設置されるなどの進展はあった。今後も関係者で状況を共有しながら、そのあり方について対話を進めることが望まれる。

柏の葉近隣センターの設計が次年度にわたって進められる。引きつづき地域の声を取り入れるための様々な方法を導入しながら、設計や運営に反映させていく必要がある。

これまで整備されたきた公共空間のうち、公共管理部分を中心に街路樹や植栽帯について十分な管理ができていない状況がある。デザインだけでなく、質を維持するための管理のあり方についての議論を進めることも求められている。

次年度以降の重点課題

- ▶ 「学園の道」・「緑園の道」のあり方検討
- ▶ 近隣センターにおける参加型の設計協議
- ▶ 公共空間の質の維持のための基準整備や体制の構築

目標8 イノベーションフィールド都市

柏の葉では、まちづくりの中で先導的あるいは実験的なプロジェクトを進んで受け入れ、共創によるイノベーションを生み出すフィールドとなることを目指している。

2019年5月には、国土交通省のスマートシティのモデル事業に柏の葉スマートシティコンソーシアムの提案が選ばれ、2020年3月に実行計画を策定。昨年度から今年度にかけて改定作業を進め、2025年10月に改定版を発行。新たに「学び」などが重点分野に位置づけられた。柏の葉スマートシティのテーマである共創を支えるのは、①柏の葉データプラットフォーム（KDPF）、②柏の葉リビングラボ「みんなのまちづくりスタジオ（みんスタ）」、③実証実験のプラットフォーム「イノベーションフィールド柏の葉」の3つの仕組みである。これらを組み合わせ、企業等の実証実験を積極的に受け入れ、支援する仕組みとして、2024年度には共成長ビジネスプログラム「CO-GROWTH」がスタートした。KDPFに紐づくスマートライフパスのサービスは、昨年度の神戸に続き今年度さらに他都市への展開が進んだ。みんスタは、昨年度からの「公園編」に続き、新たに「近隣センター編」がスタート。柏市の施設整備への適用が進んでおり、そのなかでオンライン上の対話プラットフォームである「みんスタ ONLINE」も積極的に活用されている。

1. 柏の葉スマートシティプロジェクト

■コンソーシアムの運営とプロジェクトの推進

柏の葉スマートシティコンソーシアムの参加団体は2026年3月時点で30団体となっている。柏の葉スマートシティコンソーシアムの全体会議を、10月15日及び3月16日の2回対面で開催した。会議では、スマートシティ・ビジョンブックの確認・公表や重点分野の進捗状況、参加団体の取組みなどの共有がなされ、参加団体間の認知や交流にも繋がる機会となった。また、他団体の取り組みを学び、今後の柏の葉の活動に活かしていくため、「スマートシティ岡崎」及び名古屋の「STATION Ai」の視察研修を3月18日に開催した。5団体17名が参加した。

また新設した「イノベーション促進費」においては、参加団体から2件のアイデアが出された。その内 TOPPAN デジタルの提案「DX技術を活用したスマート農業を学ぶ出前授業の実施」について、地域の小学生30名程度を対象に実証を行った。

さらに、国土交通省が公募した「令和8年度スマートシティ実装化支援事業」への応募を検討し、参加団体から3件のアイデアが出された。その内「共創支援プラットフォームの構築」及び「統合型エリアエネルギー管理システムの構築」の2件について、令和10年度を期限とする「スマートシティ実装計画」を新規に策定し応募した。



▲イノベーション促進費事業Ai 選果機体験 ▲岡崎市視察

ライフサイエンス ヘルスケア Life science/Healthcare		• 新たな医療や産業が生まれ育つライフサイエンス拠点として発展。住民やワーカーが生涯健康で暮らせるエリアとしてヘルスケアサービスの社会実装を進める。
モビリティ Mobility		• 交通手段の多様化を図り、街の利便性を高めるためにも、安全・安心な自動運転を実現し、未来のモビリティが日常的に使える街をつくる。
エネルギー Energy		• 「創エネ」「電力安定化」「グリーン電力の一般利用」等の技術を開発しつつ、街の脱炭素化に向けて公・民・学が連携して取組みを進める。
学び Learning		• 一生「学び」を楽しむことができる知的好奇心を刺激する街をつくる。企業・住民との共創を通じたりテララー向上や未来を拓く技術を学ぶ機会を提供する。
安心・安全 Safe & Secure Area		• 住民・ワーカーの日常生活の安全性を確保するための技術を街に実装する。また有事の際にも迅速に復旧し日常生活が送れるような街の仕組みをつくる。

▲柏の葉スマートシティ・ビジョンブックと重点分野

■経済産業省「未来の教室実証事業」（柏の葉「まちスク」トライアル）令和6年度に柏の葉スマートシティコンソーシアムにおいて「会津若松スマートシティ」を視察したが、そこで実装されていた、学校を地域の人々で支える学びのプラットフォームである「まちスク」について、サービスを構築・運営し、柏の葉スマートシティコンソーシアムの会員団体である TOPPAN 株式会社が、経済産業省「未来の教室実証事業」に応募し採択された。これを受けて、都市部の横展開モデル地域としての実証を柏の葉エリアで行うこととし、今後の柏市全域への展開を視野に入れつつ、教育委員会にも情報を共有しながら、柏の葉エリアでの実証を行った。

学校ユーザーとしては、柏の葉小学校、柏の葉中学校、柏の葉高校に対して協力いただくとともに、流通経済大学附属柏高等学校等、私学高校に対しても情報共有を行った。また、支援ユーザーとして地域企業や市民団体、大学・研究機関に対して説明会や個別説明を行い協力いただいた。実質2カ月程度の短期間での実証となったものの、23団体から27プログラムが提供されるとともに、柏の葉中学校で行われたキャリア講義でマッチングが1件成立するなど、好事例として国からも評価される成果となった。



▲「まちスク」実証イメージ

2. 柏の葉データプラットフォーム【データ活用基盤】

柏の葉データプラットフォーム（KDPF）は、生活者向けサービスのポータルサイト「スマートライフパス」と、利用者が同意したパーソナルデータを企業間で安全に連携できるシステム「Dot to Dot」で構築されている。従来、情報管理の問題から難しかった企業や研究機関、行政などが保有するデータを連携し、相互に活用できるようにすることで、全く新しいサービスや、パーソナルデータに基づいてカスタマイズされたサービスを提供することを目指している。2020年11月の運用開始以来、サービスが充実し、スマートライフパスの登録者は柏市内だけで5000人を超えた。スマートライフパスでは、AI活用による健康アドバイス「カロママプラス」、パーソナルフィットネス「Beatfit」、バイタルデータ管理「Health Data Bank」、医療従事者への健康相談「MedicalNote」、ベビーシッター・家事代行マッチング「KIDSLINE」、デジタル施策支援「マイグル」など多様な提携サービスを提供している。

■データプラットフォームの他都市への展開

データプラットフォームのシステム連携・統合化が全国的に進められるなか、KDPFの健康増進・疾病予防サービスを全国に提供するため、他都市展開が進められている。自治体が繋がることで、他自治体で生まれたサービス・アプリを横展開することも可能となる。2024年8月に本格導入されている神戸市では、今年度、国土交通省の渋滞緩和事業に採択され、10月～12月に「神戸GPSスタンプラリー」の実証が行われた。

新たに、愛知県において、県全域で提供するヘルスケア基盤として採択、静岡県焼津市では、市の健康増進事業に採択され2025年8月から稼働中、千葉県船橋市では、市のポータルとして採択され、2026年3月稼働した。

3. みんなのまちづくりスタジオ 【市民共創プログラム】

■「みんなでつくるあたらしい公園」編（目標②参照）

整備が予定されている新しい公園（2号近隣公園）について、地域住民の意見やアイデアを取り入れながら計画を検討することを目的として、昨年度から今年度にかけてプレイベントと全4回のワークショップを開催。公園予定地を実際に体験する機会を起点として、公園での自然体験、日常的な過ごし方、賑わいの創出、利用ルールの検討へと段階的に議論を深めていくプログラムを組んだ。バスケットコートやアスレチック遊具の新設、植栽計画などに反映された。本プログラムのプロセスをベースに、みんスタの概要をパンフレットにとりまとめ、発行した。

■「みんなでつくるあたらしい近隣センター」編

新たに整備が進められる柏の葉エリアの近隣センターの計画や検討状況についてユーザーである市民に周知するとともに、施設に求められる役割や活用の可能性について意見を収集し、設計に反映することをねらいとして「みんなでつくるあたらしい近隣センター」編をスタート。2月22日にKOIL TERRACEにて開催した第一回は、設計者を含む関係者によるフォーラムと、参加型ワークショップで構成。80名が参加し、関心の高さがうかがわれた。次年度も設計と並行して、継続開催する予定である。

■みんスタ ONLINE

オンライン合意形成プラットフォーム「みんスタ ONLINE」のユーザーアカウント数は、2023年4月の運用開始時点では117アカウントであったが、リアルイベントとの連動を通じて登録者が増え、2026年3月時点で600アカウントに迫っている。まちづくりに関する意見や気づきに関して投稿された「ボイス」数は2026年3月12日時点までに2,354件となり、まちづくりに関する市民の声がオンライン上に蓄積されつつある。今年度は、生成AIによる論点整理機能が導入され、スペースごとに投稿されたボイスの傾向や主要な論点を整理できるようになった。



▲みんなでつくるあたらしい公園編 左：開催の様子 右：パンフレット

4. スマートシティの発信とプロモーション

■イノベーション・ショーケース | 三井不動産・UDCKTM

10月24日、柏の葉カンファレンスセンターにおいて、ビジネスカンファレンス「柏の葉スマートシティ INNOVATION SHOWCASE」を開催した。企業誘致に目的を絞り、「試せる街 柏の葉」をテーマに、アカデミアや企業と連携。具体性のある実証事例にフォーカスするため、既に街を活用している明治、千葉大、アステラス等にも登壇いただいた。当日は、企業、スタートアップ、アカデミア、行政など75の企業から127名が参加し、柏の葉が有する実証フィールドや共創基盤、先進的な取り組みを紹介。イノベーションフィールドとしての柏の葉を発信し、連携する機会となった。

■WEB サイト、SNS を通じた情報発信 | UDCKTM

柏の葉スマートシティ WEB サイトや Facebook などを通じて、まちの様々なプレイヤーや活動を高頻度に発信。WEB サイトでは、スマートシティコンソーシアム参加団体の取材・PR も行った。

■市民向けガイドツアーの開催 | UDCK

地域住民に対するスマートシティの周知を進めるために、UDCKにて市民向けガイドツアーを実施している。今年度は昨年度に引き続き、地域の大人向け及び小学生向けプログラムを充実させるとともに、新規に外部の教育旅行向けのツアーを企画に取り組み、計3回で合計で103名の方にご参加いただいた。

□小学生向け「スマートシティツアー」8月4日(月) (21名)

□市外小学生向け「スマートシティ教育ツアー」11月7日(金) (65名)

□大人向け「スマートシティツアー（ウェルネス編）」2月21日(土) (17名)



▲イノベーションショーケース



▲小学生向けツアー

今後の課題と展望

新たなスマートシティ実行計画（ビジョンブック）を定め、より広いテーマで、データを活用したまちづくりを進めることが打ち出されている。KDPFは各地に展開が進み、モデル的な取り組みが進む。柏の葉においても次年度に向けて国土交通省の実装化支援事業の応募を行ったところである。

AIの台頭により、データを活用したスマートシティの考え方もバージョンアップする必要がある。これまでの議論や実績、各地で取り組みも踏まえ、地域の暮らしやサービス提供者の実務に寄与する仕組みについて議論を深度化しつつ、実効性のあるプロジェクトを生みだしていく。

まちぐるみで新たな体験やサービスを共創し、課題解決につなげられる土壌・文化があることが柏の葉の強みである。「みんスタ」や「CO-GROWTH」を活用し、企業等と呼び込み共創事例をつくりあげていくことが求められる。

次年度以降の重点課題

- ▶ まちのデータの活用・連携の仕組みづくり
- ▶ 共創の仕組みの活用と事例創出

Kashiwanoha International Campus Town Initiative

柏の葉国際キャンパスタウン構想

フォローアップ調査 2025【概要版】

2026年 3月



KASHIWA-NO-HA

柏の葉国際キャンパスタウン構想委員会

(千葉県 + 柏市 + 千葉大学 + 東京大学 + 三井不動産株式会社)